



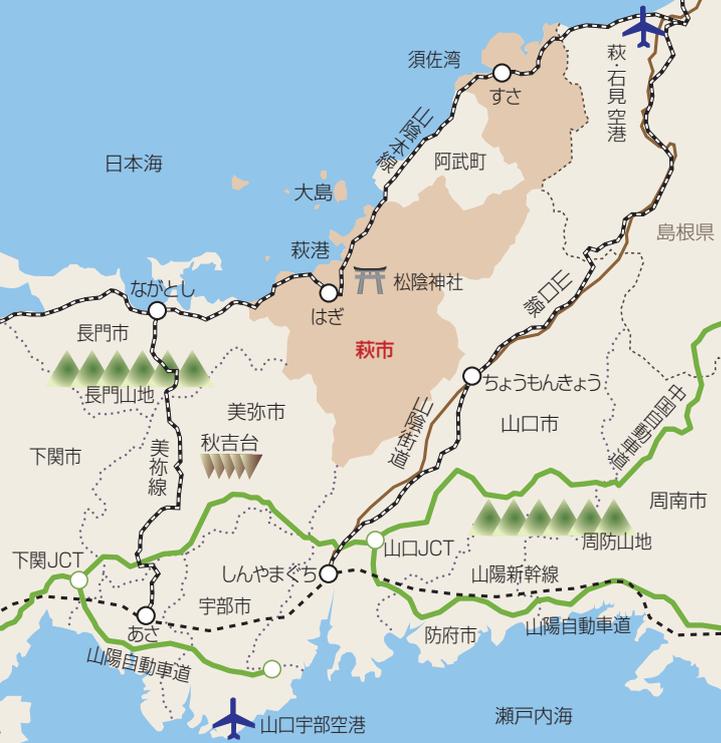
地域の底力——山口県萩市

時代を切り拓く 維新の志士の魂を受け継ぐ 山口県萩市

明治維新、そして産業の劇的な近代化。
長州藩で学び、育った若者たちが、
日本を大きく変えてから一五〇年。
先達が残した歴史的資産を守りつつ、
萩市は新たな一步を踏み出そうとしている。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

高台から眺めた萩市中心地。川の向こう、明かりの集まる場所がかつての城下町。右端の小山は、1604年に毛利輝元が麓に萩城を築いた指月山。現在は「指月公園」として整備され、春には約500本のソメイヨシノや天然記念物ミドリヨシノが咲き誇る。



かつての長州藩の拠点、指月山の萩城跡。5層の天守閣はじめ建物は1874年に解体されたが、石垣や堀が当時の面影を残す。

明治維新から一五〇年 新しい萩を目指す節目

山口県北部に位置する萩市は、慶長九年（一六〇四）の毛利輝元による萩城築城以来、約二六〇年にわたり毛利家が治めてきたまち。幕末には吉田松陰、木戸孝允（桂小五郎）、高杉晋作、伊藤博文ら、明治維新の立役者を数多く輩出した。二〇一五年に放送された、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」も記憶に新しい。

二〇一八年は、明治維新から一五〇年。明治改元の詔書が出さ

れた十月二十三日には、「萩・明治維新150年記念式典」ほか多彩なイベントが開催された。その目的は、過去を振り返るだけではない。二〇一七年三月から現職を務める萩市長の藤道健二氏は、「新しい萩と時代を切り拓こう」というテーマのもと、あらたなスタートを切る節目だと話す。



萩市長就任から約2年。長期的なビジョンを持ちつつ、時間をかけて萩のまちづくり、ひとつづくりに取り組みたいと藤道健二氏は話す。

現在の人口は、約四万八〇〇〇人。最盛期から比べるとほぼ半減したまちの活性化を図るべくさまざまな取り組みが行われるなか、市が掲げる三本柱の構想の一つが、産業の要である観光の充実をはかる「萩まちじゅう博物館」だ。今なお古地図が使える城下町を、歴史的施設を含めてじっくり観光

してもらうことを目指す。

「萩全域の宿泊客は年間約四万人。滞在型の旅を提案し、もっと萩で消費してもらうため、萩藩校明倫館の跡地に建つ『萩・明倫学舎』をはじめ歴代の方々が整備してきた観光資源を生かした試みを進めています」

二〇一八年七月には萩市観光協会を日本版DMO（注1）に登録し、そのマネジメントを担う責任者は前年に公募で選定した。

「DMOの責任者は、いわば萩の観光のリーダーです。商工業、宿泊業から農林水産業まで、これまでそれぞれに展開してきた観光関連業者をまとめ、観光客を取り込んでいこうと思っています」

二〇一八年九月には、維新とマダマ胎動の地「萩ジオパーク」が「日本ジオパーク」に認定。自然の景観はもちろん、豊かな漁場やおいしい野菜・果樹を育む水はけの良い土地、萩焼のやわらかな風合いを生む花崗岩など萩らしさの根源を大地に求め、物語が広がるのが面白い。

三本柱の構想の二つ目は、地域産業振興だ。

「萩市は二〇〇五年に一市二町四村が合併してできたまちで、農業と漁業が中心の産業。担い手の確保や農産物の直売に加え、『萩の瀬つきあじ』『萩のあまだい』といった食材のブランド価値を高めるなどの取り組みも進行中です」

注1 / DMO (Destination Management/Marketing Organization) 官民などの幅広い連携によって地域観光を積極的に推進する法人組織。



左／「松下村塾」の塾生だった伊藤博文らの尽力により、1907年に創建された「松陰神社」。下／松陰神社境内に建つ「明治維新胎動之地」の題字は、建立時の総理大臣で山口県出身の佐藤栄作の筆による。



「松陰先生や門下生は、広い知識、国や社会をよくしたいと思う志、人を育てることの重要さ、さらには時代を切り拓いていく強さを萩に残してくれたと思っっています」

上田氏だけではなく、萩の人たちは今でも、あたりまえのように「松陰先生」と口にする。小学校の授業では、吉田松陰の言葉を朗読する時間もあるそうだ。



「萩の子どもたちは、理屈抜きで松陰先生の教えを覚える。年を重ねるにつれ、その意味がだんだんとわかるようになるんですね」

享年二十九歳。短くも濃密な人生を駆け抜け、変革への道を切り拓いた吉田松陰は、今なお萩の人の心に深く根付いている。

その教えの数々は、現在にも通じると上田氏は話す。

「例えば、『飛耳長目』。情報収集のことです。情報を集め、それをきちんと分析して正しい方向に持っていく。今でいう、インテリジェンス。その重要性を、松陰先生は既に江戸末期に実践していたんですね」

「松下村塾」はその名声、功績から考えられないほど質素で小規模なつくりで驚かされる。吉田松陰のもと、数多くの志士がここで学び、日本が生まれ変わる流れを作った。

萩焼四〇〇年の歴史を未来へと継ぐために

坂高麗左衛門第十四世当主坂悠太氏。高麗左衛門の名は、文禄・慶長の役の際、毛利輝元が陶工李敬（後に初代道忠）を兄の李勺光とともに朝鮮から連れ帰ったことに由来する。



歴史同様、昔から萩の名を広く知らしめてきたのが萩焼だ。代々、萩藩御用窯を務めてきた坂高麗左衛門窯の十四世当主、坂悠太氏にその背景を伺った。窯には、長州藩初代藩主毛利秀就（毛利輝元の長男）が初代当主を「高麗左衛門」に任じた、寛永二年（一六二五）の辞令が残る。

「慶長九年（一六〇四）の毛利公



右／坂氏が形にした萩の土に命をあたえる登り窯。左／十二世、十三世、坂氏の作品。作家により表現は異なるが、自然と調和するやさしい表情をたたえている。

萩入府に伴い、私の先祖を含む陶工たちが、この場所に築いた御用焼物所で作陶を始めました。その後、他の陶工たちは新たに別の場所に窯を築きそちらへ移ります。が、坂家はこの場所に残り、今日までこの場所を守っています」

窯が位置するのは、まちなかから離れた山間の自然豊かな地域。



木戸孝允旧宅や高杉晋作誕生地などが残る、旧城下町に建つ「萩博物館」。「萩まちじゅう博物館」構想の要として、幕末を中心に萩の歴史に関する展示を行っている。

水や窯をたく薪を確保しやすかったことが、この地が選ばれた理由ではないかと坂氏は話す。

窯の一角では、初代をはじめ歴代当主の作品を拝見。萩焼のやさしい風合いを保ちつつ、それぞれに異なる思いが感じられる。母である先代の急逝により、二〇一四年に二六歳の若さで伝統を受け継いだ坂氏は、自らの立ち位置を穏やかな眼差しで語った。

「現代、私たちは無限に近い選択肢を知ることができませんから、ともすればどちらに進めばよいのか迷うこともあります。伝統とはそれらの現在位置を示す灯台である、との言葉をかつて頂戴したことがありますが、時代の先へ進むうとする人にとって、私達の窯がそのような存在であり続けたい。そのために、まずは確かに伝統を受け継ぐことを目指しています。一方で私自身も、伝統を乗り越えて先に進めるように、迷いながらも進んでいきたいと思っています」

萩焼は、まちの歴史を構成する一要素だともいう。

「萩のまちは約四〇〇年前に建設されましたが、明治維新後は県の中心が山口市に移ったこともあり、当時の町並みや文化がそのまま保たれています。私たちが坂窯も、萩というまちと同じ時間を歩んできたので、これからもこの場所そして萩焼をしっかりと守り伝えたいですね」

地産地消の 萩の酒を生んだ蔵元と 米生産者の先駆的試み

歴史、食、器に加え、現在は六蔵（阿武町の一蔵含む）ある酒蔵もまた、萩の魅力だ。そのひとつ、「長門峡」を醸す岡崎酒造場があるのは、二〇〇五年の合併により萩市となった旧阿武郡川上村。社長たかひらの岡崎考浩氏は、合併による変化を語る。

「以前はイベントなどで『萩の隣の阿武郡』と説明しても、伝わらなかつた。でも今は、『萩の蔵です』という一言でわかってもらえるようになったのは大きいですね」



毎年春に開催される「萩の酒まつり」ほか、六蔵が協力してのPRも展開。さらに二〇一八年三月に、萩市専用の精米所「萩酒米とう精工場」が完成した。

「萩市・阿武町の蔵元と米の生産者が連携した、『萩酒米』が協同組合」が手がける精米所です。萩の生産者がつくった米を萩で精米して、萩の酒蔵で造る。全て地産地消。しかも一〇〇%、山田錦です」

こうした試みは全国に先駆けた画期的なもので、各蔵の酒をセツトにして売る計画もあるという。岡崎酒造場は実は、一九八六年に初めて日本酒のリキュール酒を出した酒蔵でもある。

「ここ、旧川上村はゆずの自生地として、国内で唯一、国の天然記念物に指定されているんです。そのゆずで村おこしをとの流れから、酒蔵として何かできないかということの商品が開発されました」

クリアな飲み口ですがすがしい印象を残す「ゆずリキュール」は、二〇一七年からマレーシアに輸出され、静かな人気を呼んでいる。

「海外への出荷のお話は今までもありましたが、一度きりで終わることが多かったんです。でもマレーシアに関しては、量は多くありませんが定期的に注文を頂いて



上／岡崎酒造場代表取締役社長の岡崎考浩氏。自らも杜氏や蔵人とともに、冬場は日本酒の仕込み作業に携わっている。左／岡崎酒造場の美酒の一部から「だいたいリキュール 白小花」「ゆずリキュール」「長門峡」。長門峡は蔵がある川上地域にある峡谷で、国指定の名勝。



「萩大島船団丸」および GHIBLI 代表取締役を務める坪内知佳氏。左から2番目は、坪内氏の人生を変えるきっかけとなった船団長・長岡秀洋氏。紆余曲折が重ねられた創設当初のエピソードは、坪内氏の著書『荒くれ漁師をたばねる力』（朝日新聞出版）をご参照いただきたい。

います」

最近ではシンガポールからも引き合いが出てくるなど関心は広がりつつあり、リキュールが先陣をきった後の萩市や山口県の酒の販売にも期待がかかる。

水産業界に

維新の風が吹く 漁師たちの取り組み

食と水産業の世界では、取った魚を漁師が消費者に直接出荷する

「船団丸」の活動が注目されている。その先頭をきってビジネスを推し進めるのは、「萩大島船団丸」および実務的な運営を担う GHIBLI 代表取締役の坪内知佳氏だ。漁獲量や魚価格の低下、



「萩大島船団丸」の拠点である大島は、萩港から25分ほどの距離。人口約700人の多くは、漁業に従事している。

燃料の高騰などが漁師の生活を圧迫、そんな状況をなんとかできないか。二〇一〇年に縁あって知り合った萩大島の漁師長岡秀洋氏から、そんな相談を受けたのがきっかけだと坪内氏は振り返る。

坪内氏は漁師自らが消費者に魚を出荷することを提案し、結果的には二〇一一年、農林水産省が進める六次産業化法のもと、中国・四国地方における認定事業者第一号となる。

「萩大島の魚のクオリティーは日本一だと思っていますが、従来市場を通じた流通経路では、消費者に届くまでに時間がかかり過ぎ、味も鮮度も落ちてしまう。それを乗り越えようとすれば、自分たちで消費者に直接届けるしかなかった」

当時二四歳だった坪内氏は水産業に関してまったくの素人。一方、漁師たちは漁では誰にもひけをとらないが、出荷作業は経験したことがない。加えて長年培われてきた業界のしがらみは強く、何度か壁にぶつかった。意見の衝突は日常茶飯事。五里霧中の船出だった。

ときには漁業界の常識をくつがえす活動に二の足を踏む、長岡氏ほか漁師を説得。さらには坪内氏自ら一軒、一軒、首都圏の飲食店をまわって市場を開拓。現在は一〇〇軒以上の顧客を抱える。また、人員確保のためインターンを募ったところ、七人もの移住者が助っ人として加わった。

北海道、高知と船団丸の活動は広がり、坪内氏は海外への販路開拓も視野に入れつつ日々、国内外

を飛び回っている。苦労を重ねた経験をもとに他の地域で実務指導にあたる漁師たちは、コンサルタント料という副収入を得られるようになった。また、大島で取れたての魚を食べるツアーを開催するなど、活動は実に多岐にわたる。こうした萩大島船団丸の取り組みは軌道に乗ったかのように見える。しかし坪内氏は別の観点から強い危機感を抱いている。

「自分たちのビジネスさえよければよいというものではありません。日本の漁業全体を考えれば、この船団丸のビジネスモデルを全国の四七都道府県に水平展開すべきただと思っっているんです」

坪内氏が次に目指すのは、漁業の取り組みを、農業や林業といった他の第一次産業にも広げていくことだ。

「萩市は消滅可能性都市に名が連なっている。何か手を打たなければ、経済的に成立しなくなる。農林水産物などの天然資源も同じ。このままでは一次産業が立ち行かなくなるかもしれない。そうならないよう誰かが先頭を切って進まなくてはいけない。もともと



主屋ほか5棟が国の重要文化財指定となった、萩藩御用達の豪商の住まい「菊屋家住宅」。かつて使われた民具や美術品の展示や庭など見所は多い。住宅に面した「菊屋横丁」は、「日本の道百選」にも選ばれた趣きある景色。



最後にお話を伺ったのは、萩市観光協会名誉会長松村孝明氏^{たかあき}。旅

歴史を誇りに思うことが地域おこしにつながる

日本は豊かな国だったわけですから。各地にあるものを上塗りせず、掘り起こす作業がしたい。『地方創生』ではなく『地方再生』ですよ」

坪内氏の笑顔と前進あるのみの姿勢が、萩から日本を変えた志士たちと重なり胸が熱くなった。

館「萩本陣」の代表取締役社長として、長年にわたり自らも観光業の現場に立ってきた。

「日本の近代化は、間違いなく萩から始まった。松陰先生をはじめとする先達が残した歴史、古い街並みなど、萩にはすでに多くの観光資産があるんです」

自然、食もまた然り。この資産をいかに強く情報発信していくかがこれからの課題だ、と松村氏は話す。同時に大切なのは、住む人がその資産をきちんと理解することだとも。

「ここに住む人が自分のまちの価値を認識していくことが観光のベースになる。それにともない、ここは本当にいいまちだ、と思う空気が自然と醸成されることが、まちづくり、さらには地域おこしにつながるのだと思っています」

萩市では歴史関連のセミナーの人气がとて高いという。培われた知識は、市民が協力して観光を支える「NPO萩観光ガイド協会」などに生かされている。

維新をなし得た人やそこに続いた人が、大学や企業の創始者になった史実をふまえれば、MICE^{マイセス}（注

2）の拠点にもなる可能性もあるのではないかと話す松村氏は、萩のまちの構造についてさらに言及した。

「三角州に位置する川内地区を中心に、四〇〇年を経た今もその都市構造を維持しているのは、毛利公のすぐれた都市計画に導かれた必然だと、私は思っています。治水事業にたけていたんですね。しかも、三角州にコンパクトシティーが創造されやすく、また近い将来のまちづくりとして、萩はCCC（Continuing Care Retirement Community＝高齢者対応社会）を目指すにはうってつけの地域と考えています。萩は古くてあたらしいまちなんです」

城跡を中心に形成される城下町は、まさしく松村氏の言葉どおりコンパクトに集約されていた。江戸時代へと容易に時間旅行ができる萩には、まだまだ計り知れない先達の知恵が潜んでいそうだ。

伝統を受け継ぎ守る人、新たな挑戦を重ねる人……。萩で出会っ



萩市観光協会名誉会長の松村孝明氏。代表取締役社長を務める宿「萩本陣」の敷地内、奥萩展望台からは指月山を基点として三角州にまとまった旧城下町が望める。

た方々の記憶をたどれば、吉田松陰の言葉へと思いが至る。

「志を立てて以て万事の源と為す」（『土規七則』より）

一五〇年の歳月が過ぎても変わらず、「松陰先生」の教えは明日へ進もうとする萩の人の道を照らしているに違いない。

「吉田松陰誕生地」近くに建つ吉田松陰と金子重之輔（右）の銅像。一八五四年のペリー来航時、ふたりは伊豆下田に向かい、大胆にもアメリカへの密航を試みた。

